

教職 10 年経験者の教職意識

善 明 宣 夫

はじめに

教師教育を考えると、pre-service としての大学等における教員養成と、in-service としての現職教育を含めてとらえるのが一般的であるが、これまでややもすれば大学等での教員養成の問題に力点が置かれ、40 年近くに及ぶ教師のライフコース全体を俯瞰した現職教育の問題点や課題についてはあまり研究がなされてこなかったのが現状であろう。教師のライフコースをみると、教師としてはじめて教壇に立ち、教育への思いと情熱を無我夢中で子ども達にぶつけていく初任期、中堅層として様々な役割をこなすことが期待される時期、校務分掌の責任者として活躍が期待される時期、管理職として学校の経営や管理を任される時期等、そのステージは多様であり、当然各ステージで求められる教師の力量や職務能力にも違いがみられる。

現職教育に関しては、各ステージで求められる教師の力量や職務能力の形成・発達を目的として、従来より採用後 1 年間の初任者研修や 5 年目研修等の経験者研修、さらには管理職研修や生徒指導主事研修等の職位や職務内容に即した公的研修が実施されており、その効果についての評価は分かれるものの、公教育の水準の維持や向上という趣旨からは、これまでに一定の役割を果たしてきたといえる。こうした中、2002 年の中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」を受けて、2003 年度からは経験者研修の一環として 10 年経験者研修の実施も本格化している。本学教職教育研究センターも、兵庫県教育委員会の委嘱により、2003 年度から 10 年経験者研修を実施しており、毎年延べ 300 人を超える現職教員が夏期休業期間中に本学で生徒指導研修を受けている。

ここで教師のライフコースにおける最初の 10 年の意味について考えると、学ぶ立場から教える立場への大きな転換に戸惑いながら、理想と情熱でがむしゃらに子ども達にぶつかっていく新任期、教科指導や生徒指導の実践を通して迷い、悩み、未熟さや知識不足を自覚し停滞する時期、それまでの実践をふり返ることで新たな課題を見だし、実践を通して次のステップに飛躍する時期等、初任期という意味合いばかりでなく、次の段階への移行期という観点からも、教師の成長過程のなかで特別

に大きな意味を持つ時期であることが指摘されている¹⁾。

そこで、その成長過程に大きな影響力を持つとされる最初の 10 年の経験を教師がどのように受けとめ、それが教師にとってどのような意味を持つものであったのかを探るために、昨年度は研修に参加した教職 10 年経験者を対象としてバーンアウトに関する調査を行った²⁾。その結果、良好な状態と判定できるものは 45.5%で、調査対象の過半数にバーンアウト危険信号を含む何らかのバーンアウト状態がみられた。バーンアウト状態と強いバーンアウト状態をみると、それぞれ 10.7%と 5.9%で合計 16.6%になり、教職 10 年経験者の 10 人に 1～2 人の割合でバーンアウト者がみられるという、事態の深刻さをうかがわせる結果であった。また、自由記述欄の回答をもとに、教職 10 年経験者が抱える学校ストレスについてみてみると、主だったものとして、①多忙、②同僚・管理職との関係、③児童・生徒の多様化、④保護者の変化があげられていた。その具体的内容は、週 5 日制の導入による授業の過密化、教員数の不足による仕事の過重負担、部活動や地域行事への参加による休日の返上などの多忙の問題、教師間の連携の難しさとそれに起因する指導方針の不一致や指導上のジレンマ、教師の高齢化や年齢構成の歪さなどによる仕事の偏りといった同僚・管理職との関係の問題、学力の低下、授業に意欲的に取り組めない生徒や基本的な生活習慣が身につけていない生徒の増加などの生徒の多様化の問題、さらには保護者の教師や学校に対する要求の厳しさや批判的態度、連携の取りにくさなどの保護者の変化の問題であった。

こうした結果から、今日の教師を取り巻く環境には非常に厳しいものがあり、多忙の中で、連携の難しい同僚との指導方針の不一致や指導上のジレンマに悩みながら、多様化した児童・生徒や保護者への対応に追われるといった教師の姿を垣間見ることができる。本稿では、こうした学校ストレスやバーンアウトにみられるような否定的側面ではなく、厳しい環境の下でも引き続き教職を継続させるように作用するプラスの要因についてみていくために、教師がそのライフコースにおける最初の 10 年を主観的にどのように評価しているか、また 10 年が経過する中でどのようなことに喜びや教師としての生きがいを見いだしてきたかについて、アンケート調査をもとに検討することを目的とするものである。

調査方法

〔調査対象、調査実施時期、実施方法およびアンケート調査の内容〕

2004年度(2004年8月9～11日)と2005年度(2005年8月24～26日)に関西学院大学で実施された10年経験者研修に参加した小・中・高等学校および特殊教育諸学校の教員186名(2004年度102名、2005年度84名)を調査の対象とした。10年経験者研修は2003年度から実施が本格化した教員研修制度であり、大学と都道府県教育委員会との連携協力の一環として、2003年度より本学においても実施されている。調査資料は2004年度、2005年度ともに、筆者が担当した「教師ストレスとストレスマネジメント」(各1日)をテーマとした研修の際に集団施行したものであるが、資料の回収は強制的なものではなかったために、2004年度89名(高等学校46名、中学校16名、小学校17名、特殊教育諸学校10名)、2005年度72名(高等学校32名、中学校11名、小学校16名、特殊教育諸学校13名)の計161名が以下の分析の対象とされた。なお、10年間を振り返るアンケートは、「この10年間、仕事の面では充実していたと思う」「10年経験した今、自分は教師に向いていると思う」「この10年間、何度か教師を辞めようと思った」等、教師のライフコースにおける最初の10年間での体験やそれを踏まえての適性の評価等を含む教職意識に関する22項目で構成されており、「違う」「やや違う」「どちらでもない」「ややそう思う」「そう思う」の5つの選択肢に回答を求めるもので、2004年度に調査を行ったものである。また、教師としての喜びや生きがいに関しては2005年度に自由記述形式で回答を求めたものである。

調査結果

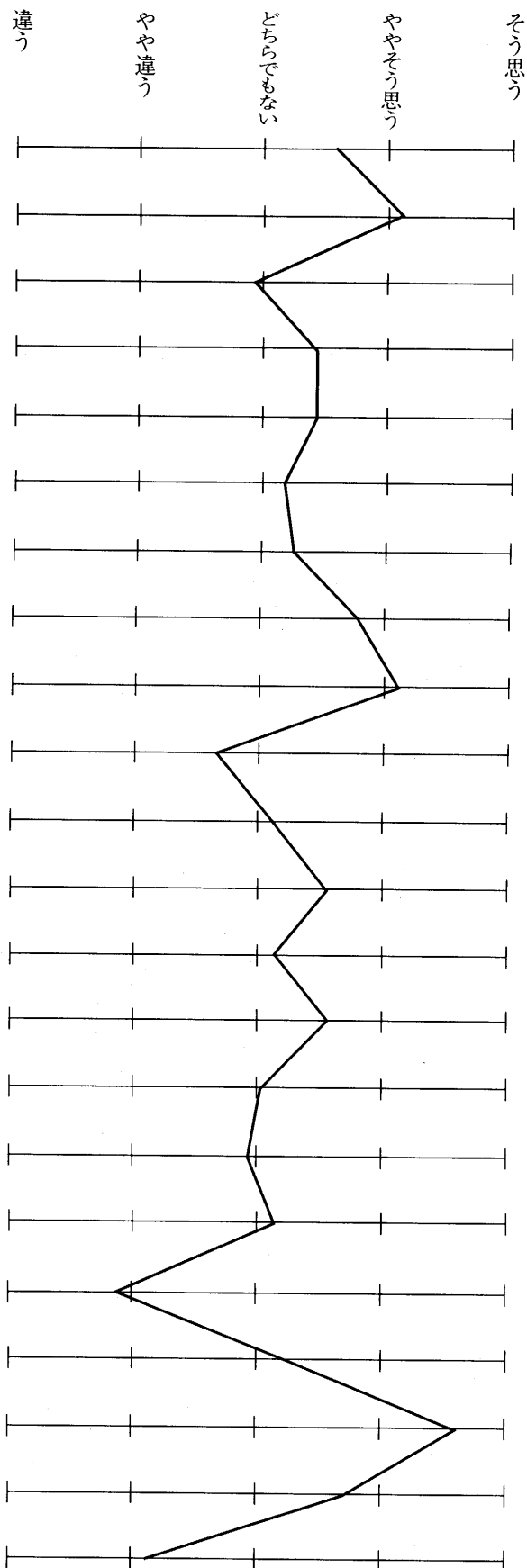
教職10年経験者の教職意識に関する調査結果について、各項目の平均得点とそれをプロットしたものが図1に示してある。「どちらでもない」という中位点からの距離をみれば、肯定的項目では「これから先、教師として学ばなければならないことがまだまだたくさんある」「この10年間、仕事の面で楽しいことがいっぱいあった」「この10年間、仕事の面ではやりがいがあった」「この10年間、仕事の面では充実していた」「これから先、教師として自分がどう成長するか楽しみである」が特徴的であり、否定的項目では「10年経験した今、教職に就いたことを後悔している」「これから先、できれば転職したいと思っている」が特徴的であった。この結果から、教師のライフコースにおける最初の10年を経験した今、10年経験者は教師という仕事にやりがい、楽しさ、充

実感を覚えながら、それで足りたとして満足するのではなく、これからも教師として学ばなければならない課題が多くあることを自覚するとともに、この先教師としてさらに成長していくであろう自分に期待と確信を持っていることが理解される。また、こうした教師という仕事に対する適性の自覚や肯定的評価から、当然教職就いたことへの後悔や転職への希望の割合は全般的に低いという結果がみられた。

ところが、他の項目にくらべ標準偏差の大きかったいくつかの項目では、学校種間で教職意識に違いもみられる。たとえば、「この10年間、何度か教師を辞めようと思った」をみると、中学校は「違う」(18.8%)、「やや違う」(6.3%)、「どちらでもない」(6.3%)、「ややそう思う」(37.5%)、「そう思う」(31.3%)、特殊教育諸学校では「違う」(20.0%)、「やや違う」(10.0%)、「どちらでもない」(10.0%)、「ややそう思う」(40.0%)、「そう思う」(20.0%)で、「ややそう思う」と「そう思う」を合わせると中学校で約7割、特殊教育諸学校では6割の教師がそうした気持ちを抱いたことがあるとしているが、高校では34.8%、小学校では僅か5.9%であった。また、「これから先、できれば転職したいと思っている」では、中学校は「違う」(25.0%)、「やや違う」(25.0%)、「どちらでもない」(25.0%)、「ややそう思う」(6.3%)、「そう思う」(18.8%)となっており、「ややそう思う」と「そう思う」を合わせると、中学校では10年経験者のおよそ4人に1人がそうした気持ちを抱いていることになるが、高校では8.7%、小学校では0.0%で、特殊教育諸学校でも0.0%という結果であった。

こうした、学校種間での教職10年経験者の教職意識の違いについてより詳しく検討するために、22項目からなるアンケート調査に対して、主因子法(直交バリマックス回転)による因子分析を行った。表1には、各因子に高い負荷(因子負荷量が0.5以上)を示した項目を網掛けにして、その結果を示してある。第I因子(寄与率30.6%)は教職に就いたことへの後悔や辞職、転職への願望(-)と、教師という仕事への適性、自信、誇りやこれからの成長に対する期待と確信を表す項目が中心であったことから、教師としての適性の自覚因子と解釈した。第II因子(寄与率12.7%)は仕事面での効力感、教師としての自分に対する満足感や肯定的自己評価、および同僚や管理職からの評価の高さを示す項目から成っており、仕事面での効力感および満足感因子と解釈した。また、第III因子(寄与率8.8%)は同僚、管理職、保護者、児童や生徒への嫌気と仕事面での辛い体験を示す内容が中心であったことから、仕事面での否定的経験因子と解釈した。さらに、第IV因子(寄与率7.4%)は10年間を振り返っての仕事面でのやりがい、充実感、楽しさと今後の課題についての意識を反映したものであること

| 項 目 | 平均得点 |
|--|-------------|
| 1. この10年間、仕事の面でつらいことがいっぱいあった | 3.62 (1.01) |
| 2. この10年間、仕事の面で楽しいことがいっぱいあった | 4.16 (0.73) |
| 3. この10年間、児童や生徒に対して嫌気がさすことが度々あった | 2.98 (1.26) |
| 4. この10年間、同僚教師に対して嫌気がさすことが度々あった | 3.40 (0.99) |
| 5. この10年間、管理職に対して嫌気がさすことが度々あった | 3.42 (0.99) |
| 6. この10年間、保護者に対して嫌気がさすことが度々あった | 3.19 (1.03) |
| 7. この10年間、自分の仕事ぶりに関しては満足している | 3.21 (0.92) |
| 8. この10年間、仕事の面では充実していたと思う | 3.87 (0.81) |
| 9. この10年間、仕事の面ではやりがいがあったと思う | 4.10 (0.72) |
| 10. この10年間、何度か教師をやめようと思った | 2.74 (1.47) |
| 11. 10年経験した今、学校での仕事はだいたいこなせると思う | 3.17 (0.97) |
| 12. 10年経験した今、教師としてよくやってきたほうだと思う | 3.57 (0.79) |
| 13. 10年経験した今、教師としての自分に満足している | 3.17 (0.89) |
| 14. 10年経験した今、教師という仕事に誇りを持っている | 3.67 (0.85) |
| 15. 10年経験した今、教師としての自分に対する同僚の評価は高いほうだと思う | 3.08 (0.72) |
| 16. 10年経験した今、教師としての自分に対する管理職の評価は高いほうだと思う | 2.92 (0.69) |
| 17. 10年経験した今、自分は教師に向いていると思う | 3.11 (0.97) |
| 18. 10年経験した今、教職に就いたことを後悔している | 1.96 (1.09) |
| 19. これから先、教師として十分にやっていく自信がある | 3.24 (0.94) |
| 20. これから先、教師として学ばなければならないことがまだまだたくさんある | 4.60 (0.67) |
| 21. これから先、教師として自分がどう成長するか楽しみである | 3.77 (0.84) |
| 22. これから先、できれば転職したいと思っている | 2.19 (1.29) |



() 内は標準偏差

図1 教職意識調査の項目別平均得点

表1 教職10年経験者の教職意識に関する因子分析結果

| 項 目 | 因子負荷量 | | | |
|--------------------------------------|-------|------|------|------|
| | I | II | III | IV |
| これから先、できれば転職したいと思っている | -.84 | -.02 | .11 | -.02 |
| 10年経験した今、教職に就いたことを後悔している | -.80 | -.20 | .11 | -.14 |
| この10年間、何度か教師を辞めようと思った | -.70 | -.07 | .15 | .03 |
| これから先、教師として十分にやっていく自信がある | .63 | .35 | -.20 | .02 |
| 10年経験した今、自分は教師に向いていると思う | .61 | .46 | .02 | .15 |
| 10年経験した今、教師という仕事に誇りを持っている | .60 | .27 | -.11 | .28 |
| これから先、教師として自分がどう成長するか楽しみである | .56 | .13 | -.10 | .46 |
| この10年間、自分の仕事ぶりに関しては満足している | .07 | .83 | .01 | .17 |
| 10年経験した今、教師としての自分に満足している | .34 | .77 | -.00 | .05 |
| 10年経験した今、学校での仕事はだいたいこなせると思う | .15 | .73 | .02 | -.18 |
| 10年経験した今、教師としてよくやってきたほうだと思う | .00 | .70 | .01 | .26 |
| 10年経験した今、教師としての自分に対する同僚の評価は高いほうだと思う | .32 | .69 | .02 | .20 |
| 10年経験した今、教師としての自分に対する管理職の評価は高いほうだと思う | .22 | .56 | -.25 | .37 |
| この10年間、管理職に対して嫌気がさすことが度々あった | -.01 | -.05 | .82 | -.06 |
| この10年間、同僚教師に対して嫌気がさすことが度々あった | .02 | -.16 | .79 | .02 |
| この10年間、保護者に対して嫌気がさすことが度々あった | -.16 | .03 | .73 | -.21 |
| この10年間、仕事の面でつらいことがいっぱいあった | -.24 | .15 | .65 | .07 |
| この10年間、児童や生徒に対して嫌気がさすことが度々あった | -.35 | .01 | .55 | -.22 |
| この10年間、仕事の面では充実していたと思う | .03 | .29 | -.03 | .78 |
| この10年間、仕事の面ではやりがいがあったと思う | .32 | .30 | .01 | .70 |
| これから先、教師として学ばなければならないことがまだまだたくさんある | .01 | -.13 | -.07 | .67 |
| この10年間、仕事の面で楽しいことがいっぱいあった | .08 | .13 | -.13 | .63 |

から、仕事面でのやりがい・充実感・楽しさ因子と解釈した。

以上、教職10年経験者に対する教職に関する意識調査の因子分析の結果、①教師としての適性の自覚、②仕事面での効力感および満足感、③仕事面での否定的経験、④仕事面でのやりがい・充実感・楽しさの4因子が抽出された。ここで、学校種間での教職に対する

意識の違いについて比較検討するために、各因子に高い負荷を示した網掛け項目の得点を単純加算して、因子毎の平均得点を算出した結果が表2に示してある。表から、教職意識に関する肯定的な面では、他の学校種にくらべ、一般的に中学校教師の得点が低く、第Ⅲ因子にみられる否定的な面では逆に中学校教師の得点が高くなっていることが分かる。調査対象数が少なく、学校種間での対象数に偏りもみられることから、安定した結果とは考えにくい。各学校種の平均得点について一要因の分散分析を行った結果、①教師としての適性の自覚因子と②仕事面での効力感および満足感因子で有意差がみられた(第

表2 各学校種の因子別平均得点

| 因子 | 学 校 種 | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | 高等学校 | 中学校 | 小学校 | 特殊教育諸学校 |
| 因子 I | 3.67 (0.74) | 3.00 (1.04) | 3.87 (0.55) | 3.44 (0.53) |
| 因子 II | 3.30 (0.61) | 2.76 (0.82) | 3.28 (0.47) | 3.13 (0.43) |
| 因子 III | 3.34 (0.74) | 3.45 (1.04) | 3.08 (0.66) | 3.40 (0.68) |
| 因子 IV | 4.29 (0.52) | 3.97 (0.61) | 4.13 (0.43) | 4.13 (0.69) |

() 内は標準偏差

I 因子 : $F(3, 85) = 4.20, p < .01$, 第Ⅱ因子 : $F(3, 85) = 3.26, p < .05$ 。そこで、それぞれ多重比較を行った結果、第Ⅰ因子では中学校と高校、中学校と小学校間に有意差がみられ、高校と小学校教師にくらべ中学校教師のほうが得点の平均値が低く、10年を経験した今、教師という仕事への適性、自信、誇りやこれからの自分の成長に対する期待と確信がより持っていないという結果がみられた。また、第Ⅱ因子では中学校と高等学校間で有意差がみられ、高校教師にくらべ中学校教師のほうが得点の平均値が低く、仕事面での効力感や満足感がより持っていないという結果であった。こうしたことと、既述の辞

職や転職への希望や願望に関する結果とを合わせて考えると、教師のライフコースの最初の10年を経験した今、他の学校種にくらべ、中学校教師のほうが適性の評価や仕事面での効力感、満足感の面でより否定的な意識を抱いていることが理解される。

つぎに、そのライフコースにおける最初の10年の経験を通して、実際どのようなことに教師としての喜びや生きがいを見いだしてきたのか、換言すれば今日の教師を取り巻く厳しい環境の下においても、引き続き教職を継続させるように作用するプラスの要因は何かについて検討するために、「この10年間、教師をしていて本当に良かったと思ったこと」という質問への自由記述形式による回答についてみていくことにする。記述内容は多岐にわたっていたが、およそ①授業、②部活、③学校行事、④児童・生徒の変化と成長、⑤児童・生徒や保護者からの感謝、⑥その他に分類することができた。その具体的内容は以下に示すとおりである。

①授業

「『先生、授業分かりやすかったよ』と生徒に言われたとき」(中学校・男性)。「『先生よく分かった』や『授業おもしろかった』という言葉が聞かれたときです。特に、ねらいどおりに、授業の中で子どもと一体感が持てたと感じる事ができたときには感激します」(小学校・女性)。「生徒から『先生に教えてもらって良かった。面白かった』と言われたとき」(高校・女性)。「自分が作成した教材を用いて、授業が思いのほかうまくいったとき」(高校・男性)。「十分に教材研究をして臨んだ授業で、生徒が驚いたり、楽しそうに学習に取り組んでいるのを実感できたとき」(中学校・男性)。「生徒たちと楽しんで授業ができたとき、一緒に学ぶ喜びを味わうことができたとき、自分の教えている教科が好きだ、面白い、楽しいと言ってくれたとき」(高校・女性)。「日本史の授業を通じて、『先生のおかげで日本史が好きになった。もっと歴史を学びたい』と言われたとき」(高校・男性)。「『先生に会えてよかった。先生の授業はとても分かりやすく楽しい』と生徒に言われたときには良かったと心から思えると同時に、この仕事のやりがいを実感します」(高校・女性)。

②部活

「部活で本番がうまくいったとき」(中学・男性)。「弱小チームが県大会に出場できたとき。何といっても、卒業式で卒業生から『記念品です』と、寄せ書きをしたサッカーのマスコットボールをもらったことが印象に残っています。もめ事が一番多い学年ただけに感慨深いものがありました」(高校・男性)。「ほとんど休止状態だった部活を生徒と一緒に立ち上げ、活動を再開し、2年目

で初めて全国大会の出場を果たした。生徒と同じように汗を流して奔走した時間は自分にとってかけがえのないものだった。全国大会の最後の夜、部員達から一緒に部活をしている自分の様子を撮影したものを1本のビデオにまとめてプレゼントされた。部員の多くが卒業後も手伝いに来てくれ、年に1度はOB会を開いてくれている。教師としてではなく、人間として一生つき合っていける仲間を得ることができたのが嬉しい」(高校・女性)。「ハンドボール部を一から作り、この春に3年生を引退させた。9人の部員には厳しい練習を課したが、よく育ってくれたと思う。残念ながら後輩が入部せず、部は休部になったが、彼女たちの頑張り、成長は自分に元気を与えてくれた」(中学・女性)。

③学校行事

「行事をやり終えた後の充実感」(高校・女性)。「教師が協力して学校行事等をやり遂げることができたときには充実感を感じる」(小学校・男性)。「クラスの生徒たちと、文化祭の出し物を頑張って準備し、大成功をおさめたとき」(高校・女性)。「文化祭の展示部門でクラスが大賞を受賞したとき」(高校・女性)。「学校行事に一生懸命に取り組む生徒の姿をみて、涙が出るくらい感動して嬉しかった」(中学・女性)。「応援団の練習をし、運動会当日無事に終えたときにはほっとすると同時に充実感を感じた。また修了式の後、小学3年生のクラス全員からメッセージカードをもらい、全員ということもあって本当に嬉しかった」(小学校・女性)。「修学旅行の担当をしたとき、引率者が多少苦勞をしても生徒が喜んでくれるならとホノルル・マラソンに生徒を参加させたことがあったが、旅行を終えてから『先生ありがとう』『卒業したらもう一度ハワイに行きたい』と何人もの生徒が笑顔で言ってくれたことがとても印象に残っている」(高校・男性)。

④児童・生徒の変化と成長

「子どもたちの成長を実感できること」(高校・男性)。「子どもの成長。子どもと共に私自身も成長していることを実感したとき」(中学・男性)。「一步一步問題を乗り越えることで子どもたちに自信に満ちた笑顔が見られるようになったときに、この仕事に就いて本当に良かったと感じる」(小学校・男性)。「鉄棒でぶら下がるのを恐ろしがっていた子どもが地球周りができたり、字の雑な子どもがきれいに書けるようになって友達にも認められるなど、今までできなかったことができるようになり、輝いている子どもの顔をみたとき」(小学校・女性)。「子どもたちと心をつなげて何かをやり遂げたとき。音楽会や運動会など大きな行事への取り組みで、子どもたちが主体性を発揮して頑張ってくれたとき。こつこつと取

り組み児童が自分の成長を実感してくれたとき。4月にはできなかったことが、1年を終える頃には自信を持ってできるようになっている姿を見たとき(算数や漢字、縄跳びなど)」(小学校・男性)。「1年のうちで、子どもの成長がはっきりと見えた時には本当によかったと思う。本人や親の喜ぶ顔を見ると、自分のやってきたことが間違っていなかったんだと実感できる」(小学校・女性)。「子ども達と一緒に取り組んできたことの成果が出た時、また出来た瞬間の子ども達の嬉しそうな表情を見ることができたとき。保護者と話をするなかで、その子の成長について共感し合えたとき」(小学校・女性)。「悩みを抱えている生徒の顔が明るくなったとき」(高校・男性)。「教え子たちに街で出会い、生き生きしている姿がうかがえたとき」(中学・女性)。「自分が関わっている子どもたちの成長を見ることができたとき。卒業後に出会って話をしたときなどは嬉しい」(中学校・男性)。「生徒たちが、生き生きとした表情で授業や行事に取り組んでいる時、生徒の成長を見ることができるといのは、教師という職に就いているからこそではと思う」(高校・女性)。「自分の経験や努力してきたことを伝えることで、児童の成長がみられたとき」(小学校・男性)。「命の大切さや暴力等について話す機会もあるが、その内容を受けとめ、前向きに変えようと努力する生徒の姿を見ると、その子の成長に少しでも関わることできたのではないかと思えて、この仕事に喜びを感じる」(中学・女性)。「学力が低かったり、問題行動がみられた生徒が、無事卒業できたときには報われた気がします」(高校・男性)。「不登校気味であった生徒が、卒業式の日にこちらの呼びかけに応じて、式での呼名の途中で登場した。それまで、心身の不調を繰り返し、夜中に何度も呼びだされ、話を聞くことが多い生徒だっただけに嬉しさはひとしおだった」(中学・女性)。「中学校で不登校だった生徒がほぼ皆勤で高校を卒業し、大学でも学業等大いに頑張っているという話を伝え聞いたとき、子どもの成長を実感した」(中学・男性)。「卒業生が、進学先で成績が上がったとか、授業がよく分かるようになったと報告に来てくれたときに、嬉しいと思うことがある」(中学・男性)。「よく注意をした生徒や、いろいろと話をした生徒が、卒業後活躍していることを知ったり、教師になりたいと話をしにきてくれたとき」(高校・女性)。「保護者の生活自体が危うく、学校を続けられるかどうか危なかった生徒をなだめすかし、毎日のように励ますことで、何とか仕事に就かせることができた。その仕事が合っていたのか、いまも続いており、生き生きと働いていると聞いたとき」(高校・女性)。「障害児教育にずっと関わっています。他の学校の子どもたちにくらべるとできることは少ないかもしれませんが、保護者と一緒になって子どものできることを発見できたとき、とても喜びを感じます。

たとえば、四肢に大きな麻痺を持つ子どもで、自力で動かせる部位が頭部に限られた子どもが、スイッチ学習を取り入れることにより、頭部を動かすことで自分の思いや考えを伝えることができたとき、この仕事をやっていて本当に良かったと実感しました」(養護・女性)。「どんなときにも生徒と正面から向き合ってきた。多くの時間を共に過ごすことで、生徒の良い面を引き出せたり、共に喜び、共に悲しみ、共に感じる場面がたくさん出会ってきた。生徒の成長を感じるのには教師として本当に嬉しい」(高校・女性)。

⑤児童・生徒や保護者からの感謝

「生徒や保護者に感謝されたとき」(高校・女性)。「生徒から『ありがとう』と言われたとき」(高校・男性)。「子どもたちから何気なく『ありがとう』の言葉もらったとき」(小学校・男性)。「学級のまとまりがよく、生徒から楽しい1年を過ごすことができた」と感謝されたとき」(中学・女性)。「『先生大好き』と言ってもらえるのはいつでもうれしい。新任で教えた子どもがいまだに年賀状や手紙をくれ、近況を報告してくれたり、悩みを相談してくれたりする。自分のことを心に残してくれていることが嬉しい。毎日いっぱいいっぱい過ごしているので、その時にはよかったと思うような余裕はないが、後になって、自分のことを頼りにしてくれていた、信頼してくれていることが分かったら、教師として、人と関わっていることの喜びを感じる。誰かの心の中に思い出として残れることは、1年間を毎日一緒に過ごす、教師ならではの喜びだと思う」(小学校・女性)。「学年の終わり(3学期終了)に、『来年も担任してよ』と何人かの生徒が言ってくれたときには嬉しい」(中学・女性)。「担任として3年間、いろいろと大変な思いもした生徒から、卒業式のときに『ありがとうございました。高校に行っても頑張るから』等の言葉を聞いたとき」(中学・男性)。「非常に手を焼いた生徒が、卒業後に『先生、ありがとう』といって食事に誘ってくれたとき、感謝する気持ちを持った生徒の成長を嬉しく思った」(高校・女性)。「生徒指導上、問題のあった生徒が、卒業後『先生迷惑かけたなあ。一緒に飯でも食べに行こうや』と会いに来てくれたこと」(高校・男性)。「1年間手を焼いた子どもが、転勤が決まった4月の離任式で、花束を持ってきてくれたことです」(中学・女性)。「問題行動が多く、指導に追われていた生徒が、卒業式に泣きながら花束をくれたことがある。また、転勤したときに、クラス全員で送別会をしてくれた。どちらも、時には険悪になりながらも指導を続け、深く関わってきたつもりでいたので、こちらの思いが伝わったような気がしてとても嬉しかった」(中学・女性)。「3年間、生徒指導部に所属し、多くの生徒からは疎まれたが、卒業式の当日礼を言いに来てく

れた生徒が数人だいた。当時指導した生徒会やテニス部の生徒は卒業後もたまに学校に顔を出してくれる。(高校・男性)。「息子が中学時代に先生に面倒をみてもらったことで、今も何とか頑張っていますといった内容の言葉を、卒業後数年して偶然出会った保護者から言われたとき」(中学・男性)。「生徒指導で生徒自身や親と衝突しながらも、最後に『ありがとう。先生のおかげです』と言われたとき」(中学・男性)。

⑥その他

「教師をやっていてよかったと思うことはたくさんある。自己の成長を考えたとき、知識、能力、人間性、豊かな経験等、教師をやっていたから成長できたと思う部分が大きい」(高校・女性)。「とりたてて言うことはないですが、子どもと過ごした時間が楽しく、豊かであったと実感できたときです」(高校・男性)。「生徒と喜びを分かち合えたとき、本当にこの仕事をやっていて良かったと思う」(中学・女性)。「生徒たちが自分たちの力で行動し目標を達成できたとき。教師が何かをさせるのではなく、サポートする形で参加できたときに、本当に喜びを分かち合えたと感じることがある」(高校・男性)。「子どもとの信頼関係が築けたとき、また保護者との心のつながりができたと感じたとき」(中学・女性)。「たくさんの子どもや保護者と出会えたこと。最近、保護者からの信頼を強く感じるようになり、期待されていることを嬉しく思う。また、教師側の努力や取り組みが、子どもの成長(予想以上の)という形で返ってくるこの仕事にやりがいを感じている」(高校・女性)。「一人目を妊娠したとき、保護者の方々が本当に喜んでくださって、その時に子どもを育てながら教師を続けていこうという気持ちになることができ、ありがたい体験でした」(小学校・女性)。「思いを共有できる同僚に恵まれたこと。また、それが生徒に伝わったこと」(高校・女性)。「いろいろな人に会える。教師をしていなければ、こんな立派な人には会うことができないだろうと思うような方も先生の中には多い(その一方で、とんでもない人も多いますが)」(高校・女性)。「3月に卒業した生徒が『私も先生みたいな教師になりたい』と言ってくれた。内心すごくびっくりしたけど嬉しかったです」(中学・女性)。「先生みたいな教師になりたい」といって教職に進もうとしている生徒がいたこと」(高校・女性)。

ここで、上記の自由記述結果にみられる10年経験者の教師としての喜びや生きがいについてまとめてみると、授業、部活、学校行事等の様々な教育活動において、児童や生徒に働きかけ、求められている課題について共に考え、一緒に作り上げていく過程の中で子どもの変化や成長を実感するとともに、そうした変化や成長への返礼として児童・生徒や保護者からささやかな感謝の気持

ちを向けられることに、教師としての達成感や満足感、さらには生きがいを見いだしていることが理解される。

まとめと考察

教職10年経験者を対象とした教職意識に関するアンケート調査の結果から、10年経験者は全般的に教師という仕事を肯定的にとらえており、教職にやりがい、楽しさ、充実感を覚えながら、10年経験した後も教師として学ばなければならない課題がまだ多くあることを自覚するとともに、この先教師としてさらに成長していくであろう自分に期待と確信を持っていることが明らかとなった。

今回の調査で用いた教職意識に関する質問項目は、過去の経験、現在の気持ち、将来の展望という過去から未来にわたる時間軸に沿って構成されており、過去、現在、未来を含む時間的広がりの中で、期待される役割や求められる価値観の達成を通して獲得される教職者としての自己価値についての確信を意味する職業的アイデンティティの問題とも深く関わるものである。さらに、こうした職業的アイデンティティの中核は、時間的広がりの中での将来への展望と考えられることから、教師としてこの先も成長していくであろう自分に期待と確信を持つことができているということは、教師のライフコースにおける最初の10年の経験を通して、教職10年経験者に教師としての職業的アイデンティティが形成された結果とみることもできよう。

つぎに、学校種間での教職に関する意識の違いについてみていくと、教職意識項目の因子分析によって抽出された「教師としての適性の自覚」因子では中学校と高校、中学校と小学校間に有意差がみられ、高校と小学校教師にくらべ、中学校教師のほうが教職への適性、自信、誇りや、これからの自分の成長に対する期待や確信を持つことができているという結果がみられている。また、「仕事面での効力感および満足感」因子でも中学校と高等学校間に有意差がみられ、高校教師にくらべ、中学教師のほうが仕事面での効力感や満足感を持つことができているという結果が示された。こうしたことと、他の学校種にくらべ、中学校教師の辞職や転職の希望率が高いという結果を考え合わせると、他の学校種にくらべ、中学教師は10年を経験した時点で教職に関してより否定的な意識を抱いていることが理解される。こうした結果が何に起因するものであるのかについては、中学校が義務教育の最終段階であることや思春期・前期青年期特有の心理的特徴による中学生の指導上の困難性等の問題が考えられるが、その原因は今回の調査からは不明であり、今後検討を要する課題である。また、先にも触れたが、今回の調査は調査対象数が少なく、学校種間での対

象数に偏りもみられたことから、結果の不安定性についても考慮に入れておく必要がある。

また、自由記述による教師としての喜びや生きがいに関しては、およそ授業、部活、学校行事、児童・生徒の変化と成長、児童・生徒や保護者からの感謝に分類することができ、教職10年経験者は授業、部活、学校行事等の様々な教育活動における子どもの変化や成長と、そうした変化や成長に対する返礼として児童・生徒や保護者からささやかな感謝の気持ちを向けられることに、教師としての達成感や満足感、さらには生きがいを見いだしていることが明らかとなった。子どもの変化と成長を信じ、それを願い、見捨てることなく働きかけ続けることは教育に携わる者すべてが持つべき、最も大切な姿勢といてよい。児童・生徒の多様化や保護者の変化など、今日の教師を取り巻く環境には非常に厳しいものがあるが、教職10年経験者がこうしたことに喜びや生きがいを見いだしているということは、既述の職業的アイデンティティ形成という意味からも望ましいことと考えられる。

【注】

- 1) 山崎準二「最初の10年間」、稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース－昭和史を教師として生きて－』、東京大学出版会、1988年。
- 2) 拙稿、「教師のバーンアウト－教職10年経験者を対象として－」関西学院大学教職教育研究センター紀要『教職教育研究』第10号、2005年、15-22頁。

(ぜんみょう) のぶお・関西学院大学教授)